建斗委
情宣紙
機関紙

イスクラ

ロシア語で 火花

火花はやがて炎とならん!
レーニン

日本大学全学共斗会議
理工学部斗争委員会
建築学科斗争委員会
情宣局
書記局

No.42
1970年
02-22

全世界を獲得せよ!

文責 日大全共斗理工学部斗争委・建築学科斗争委員会 書記局

図 全都の労働者・市民・学友諸君! とりわけ日大を受験する学生諸君! 68年日大斗争を斗い抜き、その過程に於いて獲得した我々の力量と質を持って、次に述べる事をすべての労働者・市民・学生諸君へのアッピールとする。68年不正経理問題に端を発した日大斗争はその大衆の蜂起より来る必然性として70年代階級斗争に直結した全共斗をへて革命的潮流を指し示った既成左翼=日共の指示をうけず、全共斗運動と正しい形を創出して斗われた。また既成左翼が斗争を問題視もしなかった、国家と市民社会の問題を大胆に提起し、東大そして全国の学園斗争と結合して、市民社会に極めて大きな影響を生ぜしめた。すなわち我々の経験の場たる日大斗争においては日常的秩序に内在する管理と被管理の関係を大衆の前にさらけ出す質として出現した。

この我々の持つ力量を語るには我々は次の点から語らねばなるまい。すなわち67年10月8日の羽田斗争以降の成田斗争、佐世保斗争、の中で我々が手に入れた質の問題である。この斗争で手に入れた「組織された暴力」そしてそこから来る既成左翼の街頭斗争への批判と、新たなる斗争形態の創作であった。まさにこの力量と質が日大斗争をも、大衆の怒りを組織化し、しかも暴力をもって登場さすにいたらしめたものである。

しかし自らの危機として70年を迎える日本帝国主義は東南アジアへの資本の侵略としてその競争力をつけるための国内市場開発のために更なる収奪を開始した。そのための国内政策としての大学立法、及び出入国管理法等々が我が国内の帝国主義的再編を許さずに斗う戦線への弾圧立法としてかけられたのである。我々の日大斗争もまさに大学立法をテコとした権力側の連日の攻撃すなわちバリケードへの機動隊による撤去→ロックアウト→機動隊右翼の学内居直り、の中で後退させられてきた。

しかし、すべての学友諸君! 及び受験生諸君!

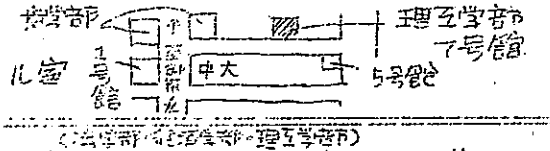
新たなる戦士として我々は次の点に注目せねばなるまい。すなわち権力による一方的弾圧によって我々は圧殺されたとする客観主義的総括にのみ依存してはならない。この総括は「強大なる」日大全共斗が強大なる権力によってその活動を封じられた、という「強大なる日大全共斗」神話を自ら創り出し、自らの限界性を大衆化させないという反革命的側面をもつが故にである。そしてその日和見的展開として街頭斗争至上主義と、何等の媒介なしの安保沖縄斗争論をマンエンさせるのである。

新たなる戦士諸君! 我々はいますぐにも権力と学校当局の工作という簡単な言葉をもってかたづけられている問題にメスを入れねばならない。そして具体的に授業再開・正常化の中で具体的に表われて来た敵との緊張関係を設定せねばならない。更には媒介点を何に求めて権力と対決するのか、そして何を媒介として70年安保斗争70年代階級斗争へ参加するのかを明確にせねばならない。

我々は日大斗争の中で大衆の普遍的怒りと憎しみを大衆武装として組織し、プロレタリア路線と、指導の問題、そして全共斗運動を貫く一本の赤い糸〈帝大解体、組織された暴力、大衆武装〉を確定させてきた。今や我々は個別大学性、地方性、分散性、経験の狭隘性、個人主義的傾向を、全国全共斗を我々が指導するという主体問題と、それを通しての全国全共斗の質的止揚(解体も含む)を目指して斗いを進めねばならない。 1970-02・21

戦う同志は理工活動者会議に結集せよ!

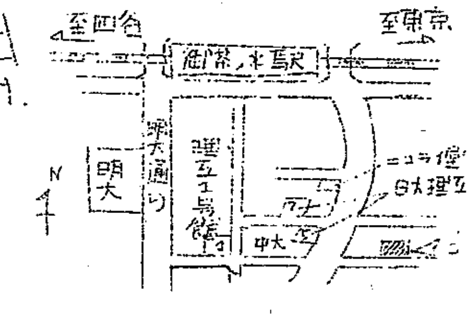
☆連絡場所
日大理工学部7号館サークル室



(法学部・経済学部・理工学部)

3月7日 第3回 神田地区政治集会

1年4年討論集会

於:電通会館
2じより